Henri Gouhier,*Bergson dans l'histoire de la pensée occidentale*,ChapitreⅧ “Le Dieu de *L'Évolution créatrice*”.におけるアリストテレスと聖トマスの神について

土屋靖明（八戸大学ビジネス学部ビジネス学科）

パリ大学教授として哲学宗教思想を講じたグイエ（Henri Gouhier,1898-1994）は、哲学者というよりも哲学史家であると自称しており、本書もそうした哲学史家グイエの労作であり、我が国では今のところ未訳の文献である。

本発表で取り扱う第８章「『創造的進化』の神」の冒頭部は、「『創造的進化』の執筆時点で、ベルクソン(1859-1941)は神をどのように考えていたのであろうか。神は存在しないと考えていたことは、確かである。正確には、アリストテレスの神は存在しないと考えていた」というものであり、本章ではアリストテレスの神を、スコラ哲学における聖トマス(1225-1274)の神を意識した論考に終始している。もっと言えば、ベルクソンの神観念は、スコラのそれとは違背すると言うのである。

アリストテレス、聖トマスにとっての神、すなわち究極の原理とは、〈不動なる第一の動者〉である。ところが、〈持続〉を中心概念とするベルクソン哲学にとって、〈不動なる第一の動者〉に普遍性を観たスコラ神学の伝統は、背理的なものとなるのである。

〈不動なる第一の動者〉をベルクソン哲学に位置付けることが困難となると、ユダヤ人ベルクソンの世界観は一元論、汎神論となるのであろうか。一元論、汎神論とは、キリスト教にとって、神と世界とを区分しない異端の思想である。『創造的進化』の執筆時点で、神は存在しないというよりも、〈神については語ることがなかった〉と話すベルクソンは、棄教することを望んではいなかったことには間違いなく、一元論、汎神論に陥ることを回避しようと盛んに暗中模索していたように思われる。然るにベルクソンは、プロティノス（205?-270?）に代表されるアレキサンドリア学派の新プラトン主義の超越的で神秘的な思想に、〈神〉というものを見出そうとしていたのではないかと考えさせられた次第である。